

中学校特別支援教育における自立支援に関する検討
—知的障害のあるK子への進路指導を通して—

社会システム研究科 地域コミュニティ専攻

2014M30001 佐藤 義則

本論文は私の教員生活の総括の意味を持つものである。私は中学校の英語教員として34年を過ごし現在に至る。教員のスタートは京都府の丹後半島の小さな町で2年間を過ごし、その後、北九州市の教育困難校と言われる中学校を5校歴任した。その間、教務主任、学年主任、専任の生徒指導主事、同和教育担当などをしてきた。50代も半ば過ぎて特別支援学校に赴任して高等部に所属し障害者自立支援法であるとか、区分認定、事業所のことなどを知り障害児教育の関心が高まった。特別支援学校の4年間勤務の後、中学校の特別支援学級勤務となり今年で3年目を過ごしている。中学校の支援学級は支援学校とは違い進路指導も重要な仕事のひとつになってくる。昨年のK子に関わる進路指導の中で、C高校への受験の失敗から、T高等専修学校の合格、そしてT専修学校の退学、そして特別支援学校高等部への編入と、彼女に関わるなかで考えた「自立」のあり方について考察した。

第1章では「特別支援教育とキャリア教育」を取り上げた。
§1では、特殊教育から特別支援教育への転換の理由をまとめた。「障害者」「健常者」という偏った見方をなくし「特別支援教育」と一本化された理由、「支援」というものについての考え方をまとめている。また「特別支援教育」の目標を障害のある子どもたちが自立、社会参加、就労は当面の目標であるとして、最終目標は、学

校卒業後の40年後、50年後の子どもたちの人生が豊かであることに求められているということに言及している。また、その教育の目標を達成するために、個々の生徒がもつ能力、生活の実態、また障害の実態に応じて、指導者側が指導内容や指導方法も変える必要性を述べている。

§2では「特別支援教育におけるキャリア教育の必要性について」述べている。

学習指導要領とキャリア教育の関係を明らかにする前に「キャリア教育」とは何かについて考察した。学校教育におけるキャリア教育は従来指導されてきた「進路指導」とほぼ同義である。「進路指導」が上級学校への移行の出口指導の色彩が濃いのが、キャリア教育は将来を担う若者たちに勤労観、職業観を育み、自立できる能力をつけることを目的とする意味合いが強くなっている。学習指導要領では「生きる力」を育み、義務教育修了までの教育を通じて自立して社会で生きていく基礎を育てるために「キャリア教育」の推進が求められている。また学習指導要領では新たに考えるべき視点として「ICFの考え方による支援」が言及されている。すなわち、障がいのある人に努力を求めるのではなく、彼らを取り巻く社会の側から彼らに近づき社会参加を促していこうという考え方である。ICFの考え方が特別支援教育そのものの考え方であると理解することができる。

§3では「自立」に関する様々な定義と私の仮説と題して、特殊教育の時代の「自立」に関する考え方を述べ、特別支援教育の「自立」のあり方を考える上で大切なことはノーマライゼーションの社会理念であること。またノーマライゼーションの具体化としてインテグレーション（統合）から、現段階でのインクルージョン（包摂）の考えにも言及している。また、「自立」の定義を学習指導要領の

中で、加藤直樹著の「障害者の自立と発達保障」の中でも求めている。また一般の辞典からも「自立」の定義について考察をしている。私なりの仮説として「自立」とは「障害があろうとなかろうと、また性別、年齢を問わないで、すべての人が主体的な考えのもと、できることは自分でし、できないことは人に頼れる人間関係が築けていることである。矜持をもつことのできる社会のもとでお互いに認め合い、支援しあうことにより自分が社会の一員として生活できていることを実感できることである。」という仮説を立てた。

第2章では「中学校特別支援学級における教育実践の検討」として個々の生徒を理解するために支援学級、支援学校の担任に課せられている「個別の指導計画」について述べている。実際の例として第3章での実践報告の中心となるK子の「個別の指導計画」を参考資料として挙げている。また、学級独自の活動が多い私の学級での年間指導計画も参考資料として挙げている。支援学校、支援学級と勤務してきた間に感じた、保護者の願いも切実なものがある。特に知的障害者のためのC高校への合格を願う保護者の気持ちとその期待に応えるため日々の指導に追われる中でも、「自立」の考えに固執する私の思いを述べている。

第3章では「事例—K子の高校受験の取り組みを通して」の中で昨年のK子という女子生徒の進路指導を通して考えたことをまとめている。K子がC高校の受験をして、二次試験で失敗したことを述べている。K子のC高校の不合格は母親の面接試験での不用意な発言も原因しているのではないか。またこのC高校の不合格からT高等専修学校への合格への道のりを描いている。合格への道はK子が努力したことは言うまでもないが同級生の支援があったことも疑いのない事実であった。T高等専修学校には合格して入学を果たしたものの、中学校の時のような支援を得られず退学をして、特別

支援学校高等部編入までの私とK子、そして母親のやり取りの中で「自立」というものについて考える私の苦悩があった。また家族関係の中で特に「K子と母親の関係性」についても言及している。また、K子が発した「障害者って、先生何？」とすぐに答えられなかった私は改めて、子どもたちに特別支援教育に関わるものとして障害のある生徒が自らの障害について可能な限り理解し、受け入れていくことを、学習として取り組む必要がるのだと痛感した場面であった。ことを自覚したのだった。

第4章では「考察—中学校特別支援教育自立支援の可能性」について、「中学校特別支援学級と通常学級の比較と考察から」始めている。このなかで現代の教育の抱える問題、また私の親の世代と現代の中学生の親の世代の比較をしながら、教育の課題を親のあり方からの考察もしている。また特別支援教育において「個別の指導計画」を作成するような個々の生徒に応じた丁寧な指導は通常学級の生徒への指導にも重要であることを説いている。「自立」について考える時に「自己尊重」という概念も必要であることも述べている。K子がT高等専修学校への進学から退学、そして特別支援学級高等部への編入の過程の中で、特にT高等専修学校への合格では同級生の支援などの支援など彼女は支援を回りにたくさんしてくれる人がいた、しかし、T高等専修学校では彼女は支援を求めること、支援を誰に求めたらよいかなどを知らなかったのもC高校退学の一因と考えられる。「支援」を求めることを教えることも中学校特別支援教育に関わる者として大切な仕事のひとつとして痛感した。自立と支援の相関関係を改めて実感した進路指導であった。